

2016年1月17日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉

聖書：マタイ6：11

タイトル：「糧を与えたまえ」

---

これまで確認してきたように、「主の祈り」は前半の神に対する祈りと、後半部分の私達に対する祈りという、二つの祈りが一つとなって捧げられている祈りである。

前半の「神に対する祈り」を簡単に振り返ると、祈りの出だしは、神に対して「アバ父、おとうちゃん」と呼びかけることが私達には赦されており、そういう非常に親密な関係が与えられている者として、私達は直接「神」に「父よ」と呼びかけることが許されて「祈り」は始められていたということである。そして「(父よ) あなたの御名があがめられますように」、「(父よ) あなたが王として納めている王国、その御国が来ますように」、「(父よ) あなたのみこころがこの地でも行われますように」と、神の栄光をたたえ、神を待ち望むそのような祈りが前半の祈りである。

そうしてこの後半の私達に対する祈りである、「私達の日毎の糧を今日もお与えください。」と、自らの糧の必要のためにも祈るのである。これはイエスがこの「糧」ということを、私達が住むこの世の現実の中で最も大きな課題の一つであることを知っておられ、それゆえこの「糧」ということをいい加減なこととして扱ってはならず、むしろその為にもきちんと祈るようにと教えているのである。神、イエスはそのように私達に対していつも現実的なお方でありまた誠実なお方である。

さて、本日の箇所は、前回と同じ箇所だが、なぜ同じ箇所から今回も御言葉を取り次がせていただいたのかというのは、この「糧」という言葉が二つの意味を含んでいるからである。

一つ目は、前回の「日ごとの糧」というのは、「今日も、明日も神のみこころを行っていくために、そのために、必要な糧を私達に与えてください、また私達だけでなく、私達のまわりにいる隣人の分をも含め、私達に必要な糧をお与えください！」と、主に「食糧としての「糧」」の祈りである。

さて、本日の二つ目の「糧」についてだが、まずこの「糧」という言葉は、ギリシャ語でアルトスという言葉で、英語でも「bread」と訳され、日本語では「パン」という意味である。このアルトス＝パンという言葉から、聖書では、イエスご自身のことを表しているとも言える。

ヨハネの福音書 6:32-35 にはこの様に記されている。

ヨハネ 6:32-35

「イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。6:33 というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

6:34 そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私達にお与えください。」

6:35 イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。」

ここで「パン」と記されているのがアルトスである。

イエスは、ご自身のことを「天からのまことのパン」と語り、また「わたしがいのちのパンです」と宣言された。

さらにイエスは最後の晩餐の席でも、パンを取り、弟子たちに配り、これは私の身体であると、パンをご自分の身体として渡されました。

そのように、この「パン、糧、アルトス」というのは、イエスご自身を指しているのである。

すなわち、この「糧、パン、アルトス」とは、単に私たちが口にする食物としての「パン」ということだけではなく、それはイエスのことであり、イエスというのは、神と共に生きるために必要な、命に至る霊的な「パン」であるということである。

本来、私達は、この命のパンであるイエスから離れては、生きていくことが出来ない！という存在である。しかし、人に罪が入ってから、人はこの命のパンであるイエス（神）を無視して生きるようになり、そのため私達はいつも自分の命のことを考えてはいても、命を与えてくださるまことの神を考えずに、死にゆく自分を自分で何とか命をつなごうと、目先の食物としての糧だけを追い求めるようになってしまったのである。これはイエスが『主の祈り』を教える前に弟子たちに語った異邦人の姿そのものである。

マタイ 4：4には、「人はパンだけで生きるのではない。神の口から出る一つ一つの言葉による。」と記されている。「食物の糧であるパンに対して絶対的に必要なのは神のことばである」ということである。

また、弟子たちもこの命の糧ということがわからず、これまでもイエスとの会話の中で、チグハグしたやり取りがあった。

ヨハネ 4：31－34にはそのことが記されている。

「4:31 そのころ、弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください」とお願いした。

4:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」

4:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」

4:34 イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行い、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」

イエスが「糧」というときに、神の御心を思わない時は無い。イエスが、この「糧、パン、アルトス」に対して、こうした理解を持っている中で、改めて主の祈りの「日ごとの糧」を見るときに、それは当然、霊的な意味での「糧」ということが含まれていると言える。

さて、そういう意味で私達は、本当の「主の祈り」を祈っているだろうか。実際は多く場合、口にする食物としての「糧」を求めることはあっても、私たちを生かすまことの「霊的な糧」を同じように今日も与えてください！」と求めていくことは少ないのではないだろうか。イエスは私たち人間に、「霊的な糧の必要がある！」、そのためにも「霊の糧、命の糧を日毎に、今日も求めよ！」そうでなければ、どうしても神の御心を知り、行い、与えられた命を輝かすことが出来ようか！ということはこの「日ごとの糧を与えたまえ」と祈る中に教えられたのではないだろうか。

私達は何としても、「日ごとの糧を今日も与えたまえ」と祈る必要がある。もし、そう思えないならば、その人には、罪の覆いが邪魔をして、神を求めることを妨げているのではないだろうか。

1ペテ 2:2には次の御言葉がある。

「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」

乳飲み子は本当に乳を求めます。与えられなければ、声がかかるまで泣き叫び、そして暴れるのである。我が子を見てもまさにそうである。聖書はそれほどに「御言葉を求めよ！」と教えている。

「日ごとの糧を今日も与えてください」という祈りは、この乳飲み子のように、霊的糧を求め祈る者であるようにということではないだろうか。